

「最強の経済学者 ミルトン・フリードマン」

ラニー・エーベンシュタイン(著)大野一(訳)

日経BP社 2008年1月28日刊

本書はシカゴ大学を世界の経済学を中心に引き上げたミルトン・フリードマンの伝記である。本書は多様な読み方ができると思うが、現役の経済学者としては、学生の教育をどうすればよいのか、経済学の実証研究はどうあるべきか、政策提言が実際に採用されるためにはどうすればよいのか、など極めて示唆に富むエピソードが面白かった。

とりわけ次の2点は重要である。まず、フリードマンの主著『消費の経済理論』と『合衆国の貨幣史』では実証的・数量的・統計学的なアプローチに基づいて、地道に統計分析を行いながら、経済学上の重要な概念、すなわち、恒常所得と一時的所得の区別や、貨幣集計量としてMIやM2を定義し、マネーサプライが景気やインフレに与える影響の大きさを発見している。現在、経済学が益々数学的になるに従い、逆に統計データを丹念に調べて、新しい概念や理論の構築を行うということが少なくなり、ウィクセル、ケインズ、ピグー、マーシャル、フリードマンら先達が導入した概念を精緻化し、再解釈することに精力が傾けられていると言っても過言ではない状況にある。本書は統計資料に基づく実証研究の原点に戻ることの大切さを痛感させてくれた。

次に、フリードマンの政策提言が多岐にわたっていることである。それは専門分野の金融政策に限定されたものではない。政府の干渉が問題を起していると言っているとフリードマンが考えた分野については、躊躇無く規制緩和・政策廃止を提言している。これには変動相場制度の導入や徴兵制廃止など最終的に実現したものも含まれている。この粘り強さにも感銘を受けた。

現代はフリードマンが扱った時代よりはるかに社会経済が複雑化しており、経済問題の解決も容易ではない。彼の主張した政策が効果をあげなかったこともあり、予測が外れたことも少なからずある。しかし、フリードマンの「実証的経済学の方法論」はポPPERの科学方法論に基づき、漸近的に真理に迫っていく他ないというものであり、自分の間違いを潔く認めることもしており、現在の保守的な経済学者よりはるかに進歩的であることも印象的である。